



特別企画／左官の技で建物に新たな価値を創造する

江戸の風情を現代に映すエントランスホール／江戸東京博物館

左官施工：(有)原田左官工業所

写真提供：東京都

江戸東京博物館は1993年3月、江戸・東京の歴史と文化を振り返りながら未来の都市と生活を考える場として開館した。開館より30年を迎え、このほど大規模改修工事を実施。2026年3月31日にリニューアルオープンを迎えた。

新たな博物館は、老朽化した内外装や施設整備を更新したほか、東西に張り出す大屋根の断熱性と防水性を向上。館内照明をLED化し、敷地内に太陽光発電設備を設置するなど環境負荷に配慮した施設へと生まれ変わった。また、バリアフリー機能やユニバーサルデザインも見直され、来館者がより安心・安全に利用できる環境が整えられている。

さらに、エントランスホールは明るく開放感のある空間へと刷新された。チケット売り場の壁面やカウンターには多摩産材を採用し、壁面の一部には伝統的な左官技術による仕上げが施されている。

本稿では、エントランスホールの左官仕上げを手掛けた(有)原田左官工業所の原田宗亮社長に左官施工のポイントなど話を伺った。

(編集部)

江戸の風情を感じてもらうために

今回、江戸東京博物館のエントランスホールに左官仕上げが採用されました――

江戸の町人文化において、左官は非常に身近な存在でした。土蔵や蔵、豪商の店舗など、多くの建物が左官仕上げによって造られていました。来場者が最初に目にするエントランスホールに左官仕上げを取り入れることで、江戸らしい風情を感じてもらいたいという意図があったのだと思います。

原田左官工業所が施工した箇所を教えてください――

総合案内カウンターの立ち上がり部分の掻き落とし仕上げ、チケット売り場壁面の漆喰仕上げ、そして柱の黒漆喰磨きになります。

表現とデザインの提案を

建築設計の方から仕上げについて具体的な要望はありましたか――